

漢字字体の組織的な略体化

——略字「尺」の構成素「尺」の場合——

菊 地 恵 太

一 はじめに

従来の漢字字体史研究においては、石塚晴通（一九九九）を始め、比較的規範に即した場面における字体使用の体系的な研究が進められ、中国及び日本における規範字体の変遷過程が明らかにされてきた。その一方で、実用的場面（規範に則る必要性のない場面）における字体の歴史や体系性については不明な面も多しと言える。例えば昭和二四年（一九四九）に告示された当用漢字字体表では、従来略字体とされていた字体が新字体として採用されたが、これらの字体の来歴についても明らかでない面が多い。そこで本稿では、実用的場面での使用が想定される字体である略字体（規範的な字体に対して簡略化された字体）を取り上げ、その中でも特に、異なる字種の字体が共通する構成要素によつて簡略化される現象に着目する。

当用漢字のうち新字体として採用された「尽」という字体は、「盡」の略字体に当たる字体であり、旧字体から特に大きく形が変わった字体の一つである。また「尺」と同様、字体の上部に「尺」という形を持つ漢字として「昼」があるが、この旧字体は「晝」であり、上部の「聿」（以下、「聿」の形で示す）が「尺」に置き換わったものである。「晝」と「盡」は上部の字体構成素「聿」或いはそれに類する字体が「尺」の形に組織的に変化していると見ることができ、一方「晝」と同じく冠に「聿」の形を持っていた「晝」は、当用漢字では「画」という「尺」の形を取らない略字を採用した。「書」は略字を採用せず、現在も「聿」の形を残しているが、この両字にも曾て「尽・晝」と同様「尺」とい

う構成素を取る略字が存在した。

近世中期の文字研究書である新井白石『同文通考』（正徳頃著、一七六〇年刊）は、「畫」の略字（省字）として「昼」の字体を掲げているが、これについて次のような註釈を加える。

昼ヒツク 畫也 按ニ畫ノ字俗作レ尽ニ後人因テ訛ニ盡ヲ作レ益ニ書ヲ作レ昼ニ畫ヲ作レ昼ニ並ニ非ナリ

（宝曆十年版 卷四・二四丁裏）

この解釈に拠れば「尽」からの類推によつて、他の字種にも「尺」を利用した略記法が転用されたということになるが、具体的にどのような過程を経て定着した字体かは説明がない。

本稿ではこの「尺」という構成素に着目し、このような略字がいつ頃から、どのような過程を経て定着していくのか、その展開を明らかにする。これらの略字体が『同文通考』の著された近世前中期に存在したことは確かであるため、それ以前の時代においてどのような変化が生じていたのか、中世〜近世初期頃の書例を中心に調査することによって詳かにしたい。

二 略字「尽」の字源説

「尺」という字体については、張涌泉（一九九五）が「楷化」の例として「尽」の字体を例示するほか、築島裕（一九八八）は「行書または草書体として使用されていたもので、その行書・草書を楷書の形にしたもの」の例の中に「尽」を挙げ、笹原宏之（二〇〇三）もまた「尽」は「盡」の草書体に基づく字体である」と説明しており、「尽」は草書を

一 原文では「昼」の字体の「田」の部分をも「囚」に作る。なお『同文通考』は和製の異体字のみを掲げる方針を取っているが、「昼」は後述のように古くから中国側に存した字体である。

起源とする略字体の典型例として捉えられる。

草書は前漢頃、隸書の捷書きから始まったものとされる。漢代木簡や竹簡（漢簡）は書体史上、この時期における隸書から草書への流れを見ることができる資料として注目されるが、漢代木簡の書例を見ると、既に次のような崩しの形が存在することが確認できる。

図一 居延漢簡における「盡」の書例（佐野光一編『木簡字典』より抜粋）



しかしこの段階では、未だ「聿」の形を強く残しており、「尺」のような形は見えない。魏晋南北朝～隋唐期の書家の手によるものと伝えられる草書の書例としては、次のような形が見られる。

図二 中国書家による草書例（北川博邦編『章草大字典』、赤井清美編『行草大字典』より抜粋）



字形は書記者の書風により多様ではあるものの、いずれも第一画に平仮名の「つ」のような形を書き、続いて縦画を貫かせるという点が共通している。これらは「聿」の運筆の名残と思われるが、この縦画が文字の中央でなく左側に寄っている、或いは左下に向って斜めに書かれる傾向があるために、この部分が「尺」のような形として解釈されたものと思われる。特に上記の孫過庭や賀知章の書例からは、「尽」という字体が導きやすい。

しかし「書」の草書体は他の字種とは明らかに異なる形である。このような形は漢代木簡において既に見られる略記

法である。

図三 「書」の草書例



皇象



王羲之



欧陽詢



智永

〔章草大字典〕〔行草大字典〕より



〔木簡字典〕より

「書」に限っては、草書体から「昏」という形を導くことができない。「昏」の字体に関しては、他字種からの類推によって「聿」を「尺」に置き換えたものと捉えるべきであろう。

三 字体の分類

三・一 規範字体の変遷

「尺」に繋がりのある草書の字体が中国において存在したことは確かであるが、ここで改めて中国・日本における規範字体を確認するため、「漢字字体規範史データセット」(旧「漢字字体規範史データベース」、以下HNG)によって各字種の使用字体を調査した。結果としては、以下のような状況となった。

まず「盡」については、隋唐期の写本及び開成石経の字体は康熙字典体「盡」と一致するが、南北朝期の写経では連火を書かない「盡」であり、小異がある。日本の写本でも両字体が混在している。

「畫」は、中国写本・刊本では「畫」の他に「畫」のように作る字体（干祿字書の「通」に一致する）が混在するが、開成石経では今日の康熙字典体と同じく「畫」となっている。

図四 「畫」の例



(S81 大般涅槃經)



(今西本妙法蓮華經)



(P2413 大樓炭経)



(開成石経論語)

なお「畫」「書」字種については専ら「畫」「書」の字体しか使用されていない。

以上のことから、構成要素に「尺」を取る形は中国・日本ともに規範字体にはなっておらず、また現行の常用漢字である「画」という字体も規範字体ではないということが確認できた。本稿では康熙字典体と同じく「聿」のような形を取るものを規範字体（非略字体）と見なし、「尺」の形を取るものや「画」という字体は略字体と認めることにする。

三・二 字体の分類

本稿では規範字体に近い形をA類、「尺」を取る形をB類として分類することにする。「畫」の中国・日本での規範字体は「畫・畫」で揺れがあるが、字体構成が大きく変わっているわけではなく、いずれも「尺」に対する非略字体（A類）として同類に扱う。また「畫」の規範字体も「畫・畫」で揺れがあるが、本稿は上部の構成要素が「聿」か「尺」かという点に着目するので、このような差異は問題としない。

また、筆画の崩しが見られる形であっても、「聿」の形を残していると認められればA類として扱うこととする。あ

なりに崩しの度合いが大きく、A・B類とも判断が付かない場合は、別にC類として分類する。

〈字体例〉

A類 (非略字体)	…	畫	(畫)
B類 (略字体)	…	畫	(畫)
C類 (略字体)	…	畫	(書)

なお実際の書例では、字種の区別が難しい例も散見されるが、集計に当たっては振仮名や文脈によって字種を区別する。

四 調査結果

四・一 『宋元以来俗字譜』

まずは中国側の白話刊本における異体字を概観できる資料として、『宋元以来俗字譜』(中華民国中央研究院歴史語言研究所・一九三〇年)の記述を見てみる。ここに掲げられている書例を見ると、B類の「尽」「昼」は宋代(実際には元代の模刻という)『古列女伝』から既に見られ、「昼」もまた元代の『京本通俗小説』(但し元代のものか否か存疑)、『古今雜劇三十種』以来使用されている。この時点で既に、「尺」は「聿」の略記法として確立され、組織的な略体化が確立していたと言える。

その一方で、現行の常用漢字新字体と一致する「画」は出現が比較的新しく、一三五一年刊『太平楽府』以降の資料において使用されている。但し、使用字体が「画」に統一されたわけではなく、B類の形とも並び使用されていたようである。

また「書」にはB類字体の例はなく、「𠄎」という形の使用が見られるが、これは第二節でも確認した「書」の草書体と一致する。これらの資料では、「書」の冠を「尺」(B類)に作るのではなく、崩し字の形を略字として使用したということであろう。現行の簡化字「书」がこの字体を起源としていることから、中国での「書」の略記法はB類字体でなく草書体の形が主流であったと見られる。

四・二 中国漢字字書・字様書の掲出字体

続いて中国字書・字様書における各字体の掲出状況を表1に示す。

結論から言えば、非略字体のA類はほぼ全ての字書において掲出が見られるのに対し、B類(尺)の形を掲出する字書は少ない。『四声篇海』は四字種全てについてB類の形を掲出するが、『字彙』『正字通』に掲出されるのは「𠄎」のみであった(康熙字典は正字通の引用)。『四声篇海』及び『字彙』『正字通』における「𠄎」の字体註記は(俗)である。また『字彙』の「𠄎」字に「宋楊誠齋主文衡同寮所取魁卷有盡字書作𠄎」という註記がある。楊誠齋(楊万里)は南宋の人物であるから(一一二七年生・一二〇六年歿)、これに従えば「𠄎」が当時から既に用いられていた字体ということになる。

一方「画」字体が掲出されるのは『字彙』以降のことであり(厳密には中央の縦画が上に突き抜けない「画」、それより古い字書にはこの形は見られない)。

以上のように略体であるB類字体は、『宋元以来俗字譜』に拠れば「𠄎」の他にも「𠄎」「𠄎」の使用例が存在したはずであるが、字書の類には掲出され難い性質のものであったと言える。

二 『四声篇海』成化版(一四六七年)では「書」のB類(𠄎)は「音書」とされているのみで、異体関係にあるとは明示されていないが、万暦版(一五八九年)では「書同」との註記が附されている。

四三 日本漢字字書の掲出字書

表1 中国字書

資料	成立年代	盡		畫			書		書	
		A	B	A	B	画	A	B	A	B
群書新定字樣	初唐	○	×	○	×	×	○	×	×	×
干祿字書	774年	×	×	○	×	×	×	×	○	×
竈竈手鏡	997年	○	×	○	×	×	○	×	○	×
五經文字	776年	○	×	○	×	×	×	×	○	×
大広益会玉篇	543年成（原本玉篇） 1013年校刊	○	×	○	×	×	○	×	○	×
集韻	1039年	○	×	○	×	×	○	×	○	×
五音類聚四声篇海	1208年成（四声篇海） 1467年校刊	○	○	○	○	×	○	○	○	○
字彙	1615年	○	○	○	×	○	○	×	○	×
正字通	1670年	○	○	○	×	○	○	×	○	×
康熙字典	1716年	○	○	○	×	○	○	×	○	×

表2 日本字書

資料	成立年代	盡		畫			書		書	
		A	B	A	B	画	A	B	A	B
高山寺本 篆隸万象名義	9世紀成 1114年写	○	×	○	×	×	○	×	○	×
天治本 新撰字鏡	900年頃成 1124年写	○	×	○	×	×	○	×	○	×
観智院本 類聚名義抄	院政期成 鎌倉時代写	○	×	○	×	×	○	×	○	×
天文本 字鏡鈔	鎌倉前期成 1547年写	○	×	○	×	×	○	×	○	×
寛元本 字鏡集	鎌倉前期成 江戸後期写	○	×	○	×	×	○	×	○	×
篇目次第	室町中期写	○	×	○	×	×	○	×	○	×
夢梅本 和玉篇	1605年刊	○	×	○	×	×	○	×	○	×

一方、日本の主な漢字字書（単漢字とその音訓を中心に掲げるもの）における字体の掲出状況は、表2の通りである。

こちらも見出し字に掲出されるのはA類の形であり、B類及び「画」の掲出は見られない。これは、中国字書と似通った傾向を示している。やはり略体であるB類字体及び「画」の字体は、漢字字書には掲出され難い字体であったと思われる。

なお、上記以外の写本では『和玉篇』米沢文庫本（近世初期写）に「画」に似た字体が示されている（図五）。この字体には「クワイ」という字音が示されているが、註記には「ツクス 盡同」という記述がある。無論中国の字書にもこのような記述はなく、何を典拠とした記述かは不明であるが、本来であれば「畫

図五



同」とすべきところを書記者が「畫」と混同したために生じた記述と思われる。だとすれば、書記者は「画」を「畫」の異体と認知していないことになり、書写当時の近世初期の段階でこの字体が広く普及していたかは疑わしい。

四・四 言語辞書における使用字体

種々の語を掲出する言語辞書類における字体の使用状況は、表3に示すとおりである。

『前田本色葉字類抄』から『筑波大本下学集』『文明十一年本下学集』までは見出し語の表記にB類の使用は見られず、一四九六年頃の『明応五年本節用集』がB類の出現する早い例となる。殊にB類の使用率が高いのは「畫」「畫」の二字体であつて、今回の調査範囲では「畫」B類は『運歩色葉集』の写本に限られている。

さらに「書」は、見出しでの掲出数が多いにも拘らず、B類を含む略字体の使用が見られなかった（但し、見出し語でなく註記部分では、『正宗文庫本節用集』に二例「昏」の例がある）。また「畫」の略体「画」は、今回の調査範囲では全く例がない。

『易林本節用集』においてはA類の字体に統一され、略体であるB類の形が見られない。易林本が略字体を採用しないというのは、他の字種についても指摘される傾向であり（菊地恵太二〇一六、二〇一八）、編纂方針の問題であろう。

四・五 上代木簡資料における使用字体

続いて辞書以外の書例として、まずは上代の出土木簡における字体を調査する。

例えば『日本古代木簡字典』（改訂新版）に掲出される書例は、「畫」一例・「畫」二例・「畫」〇例・「書」六例に留まるが、全てA類に該当する形であった。

また奈良文化財研究所「木簡庫」での検索に拠れば、「畫」五件・「畫」二二件・「畫」二件・「書」一五九件の画像を

表3 言語辞書

資料	刊写年代	A				B			
		盡	畫	書	書	盡	畫	書	書
前田本 色葉字類抄	鎌倉中期写	4	3	3	12				
大東急本 伊呂波字類抄	室町前期写	9	8	1	27				
筑波大本 下学集	室町中期写	4		5					
文明11年本 下学集	1479年写か	4		7					
明応5年本 節用集	1496年以前写	1	1	12		1	3		
黒本本 節用集	室町中期写	4	3	2	15		1		
正宗文庫本 節用集	室町中後期写	1	1	4		1	1		
広本節用集	16世紀初写	30	3	2	27				
元龜2年本 運歩色葉集	1571年写	1	5	2	27		3	11	6
静嘉堂文庫本 運歩色葉集	室町末期写	5	10	5	58		1	11	
大谷大学本 節用集	室町末期写	1	1	4			2		
饅頭屋本 節用集	室町末期刊	3	3	15			1		
天正17年本 運歩色葉集	1589年写	3	1	1	23		2	3	4
天正18年本 節用集	1590年以前刊	3	3	7			1	1	
易林本 節用集 (原刻版)	1597年刊	5	1	2	22				

得ることができた。画像が不鮮明なものや欠損部分が大きいものもあるが、それらを除いた例だけを見ても、少なくとも「尺」の形を取るB類字体は見られない。また「画」字体も同様に全く見られないものである。

四・六 辞書以外の典籍における使用状況

その他の古典籍における各字体の出現状況は、表4に示した通りである。

年代を追って結果を見てみると、『東大寺諷誦文稿』から『延慶本平家物語』までの資料でB類の使用は見られなかった。『延慶本平家物語』は全体的に柔らかい書体で書かれており、「盡」についてはC類に当たる形「𠄎」が出現していたが、明確にB類と見なせる書例は見当たらない。

今回の調査範囲でB類の出現する早い例は、室町中期・十五世紀頃の書写とも目される『神田本太平記』であった。このテキストは字画を崩しが多く見られるのであるが、「尺」は字画の明瞭な楷書の形で現れている。

その後の文献においてもB類の形が相次いで出現するようになってきていることを鑑みると、B類が普及し始めるのは室町中期頃のことと考えられる。ただ、『玄玖本太平記』『屋代本平家物語』『藤井本沙石集』『義輝本太平記』におけるB類の書例は全て「盡」字種の例であり、B類の字体が多くの字種に拡まっているとは言い難い状況である。

全ての字種について広汎にB類の使用が見られるのは、室町末期の抄物である。特に『論語秘抄』は四字種合計一〇

表4 辞書以外の典籍

資料	刊行年代	A			B			C	他	
		盡	畫	書	盡	畫	書	盡		
東大寺諷諭文稿	9世紀前期写	6	1	1						
興福寺本 日本靈異記 卷上	904年頃写		5	3	4					
大谷大本 三教指帰注集 卷上	1133年写	8	1	1	25					
前田本 日本靈異記 卷下	1236年書写	2			4					
鈴鹿本 今昔物語集 卷2,5,7	鎌倉中期写	17	1	8	75					
蓬左文庫本 続日本紀 卷11-14	13世紀後期写	4		1	5					
俊海本 沙石集 卷2,7	鎌倉後期写				4					
真福寺本 古事記	1371-72年写	4	1	1	8					
延慶本 平家物語 卷1本-2中	1420年頃写	5	2	7	52			16		
神田本 太平記 卷1,2,7,8	室町中期写		2	2	1	2				
書陵部本 雲州往来	1505年写	8		1	7					
玄玖本 太平記 卷1,2	1554年写	6			8					
屋代本 平家物語 卷1-3	室町後期写		1	5	32	5				
藤井本 沙石集 卷1,2,8	室町後期写				2	4				
義輝本 太平記 卷1,3,4	室町末期写	1		4	16	15				
米沢本 詩学大成抄 天文部	室町末期写				4	6	8	2	2	4
京大本 論語秘抄 卷1-3	室町末-近世初期写		1	5	16	16	5	10	50	
国会本 玉塵抄 卷1,2	1597年写			1	5	3	8		1	38
小城本 平家物語 卷1-4	慶長頃写					6	1	3	16	
前田本 古事記	1606年写	4	1	4	1					
蓬左文庫本 続日本紀 卷1-5	1614年写	3			5					
寛永版 中華若木詩抄	1633年刊	15	45	3	71	17	43	6		画 1例
寛永19年版 雲州往来	1642年刊	1		6	18	2		3		

八例中八一例、『詩学大成抄』では合計二六例中十八例と、B類の使用率が顕著であった。慶長期の『小城本平家物語』では全ての書例がB類となっており、この略記法の広まりを窺わせるものである。一方『玉塵抄』では「書」の略体としてB類ではなくC類の使用が顕著であり（「書」四例中三八例）、この点は筆写者の個人差によるところも大きいと思われる。

前節の古辞書での状況も踏まえると、「尺」という構成要素を取るB類字体は、日本においては当初「盡」乃至「畫」の字種から使用が始まり、後れて室町末期から近世初期にかけて、他の字種「畫」「書」にもその略記法が定着したと見なして良いであろう。

ところで「畫」の略字「画」については、ここでもほとんど書例がなく、一六三三年刊『中華若木詩抄』の書例が唯一であった。この点からも、「画」という字体は近世初期以前の日本では受容されていない字体であり、「畫」の略字としての役割はB類字体が担っていたと言えることができる。

五 略字「尺」の構成要素「尺」の普及の様相

以上の調査結果をまとめると、「尺」等の「尺」を利用した略記法については、次のような段階的な展開を描くことができよう。

- ①「盡」の略字体「尺」は、中国において南宋期（十二世紀頃）には既に存在しており、類似の字種に「尺」という構成要素を利用した略記法もほぼ同時期に存在した。
- ②日本では、室町時代中期（十五世紀）頃より「盡」または「畫」の字種において「尺」を利用する略記法が使用され始めた。
- ③室町時代末期～江戸時代初期（十六世紀～十七世紀初）においては、「盡」と類似の構成要素を持った「畫」「書」の字種にも「尺」を利用する略記法が拡大した。一方で「畫」については十七世紀以降、別の略字体「画」（十四世紀には中国に存した）の使用が始まり、その後普及したと予想される。

「尺」が草書から生まれたとする説は第二節でも触れたが、「盡」の草書体と「尺」という字画構成には大きな差異があることから、中国と日本で偶然に「尺」という字体が考案されたのではなく、既に中国側で存在していた「尺」の字体、及び「尺」を利用した略記法を日本人が受容したものと考えるべきである。また中国と日本での「尺」の出現時期、及び「画」の出現時期にも二～三百年程度の隔たりがあることから、中国側で発生した字体を直ちに受容するわけではなく、一定の時間差があるという点も窺えるであろう。

ただ、このような略記法を中国側から模倣したのであれば、当初から「盡・畫・書」全ての字種に「尺」を利用する略字体が普及しても良いように思われるが、実際にはそのような出現状況を示していない。当初は「盡」「畫」の

略字体が主であつて、「畫」「書」の略字体は後れて普及することとなつた。

この現象については、当初「畫」「書」に個別的に対応する異体字に過ぎなかつた「𠄎」「𠄎」が、漢字使用者の間で字体構成の構造的な理解、則ち「聿」の部分が「尺」に置き換えられるという分析的な認識が発達したことによつて、他の類似した字種に略体化規則を転用することが可能になつたと説明することができる。

このように、当初の一部の字種から後れて広汎な字種に組織的な略体化が及ぼされる現象は、他の字種の略字体にも見られるものであつて、例えば「釋」の略字「釈」は院政期頃から使用が見られるが、「釈」の旁「尺」が「𠄎」の略であるとする分析が進んだことによつて、室町中期頃に至つて「澤(√沢)」「擇(√扱)」といった他の字種まで同様の略体化規則を適用することが可能になつたものであつた(菊地二〇一六)。他にも「撰(△攝)」「澁(△澁)」のような符号「𠄎」を利用した略記法も、当初(室町中期頃)は一部の限定的な字種から行われ、室町末期以降には広汎な字種へ拡張されていくことが明らかとなつている(菊地二〇一八)。菊地(二〇一八)では、これらの現象を略字体の發生・普及課程における「分析的傾向」と見なした。

但し、「釈」や「撰」が日本独自に發生した略記法であるのに対して、今回の「𠄎」等の場合は中国の既存の略字体を受容したものである。本稿での調査結果は、日本で独自に略字体を生成する場合のみならず、中国側の略字体を模倣・受容する過程においても、日本人(日本における文字使用者)の字体構造に対する認識の發達が大いに影響していることを示唆するものと言える。さらに、そのような字体認識の發達が見られる時期として偶然か否か、室町時代末期という時期が指摘されるのも、注目すべき興味深い現象と言えらるであろう。

六 おわりに

以上、概略的な調査ではあるが、本稿では「𠄎」等の略記法の拡大過程、及びその過程に見られる分析的傾向について指摘した。日本において中国側の異体字がどのような認識の下で受容され、普及していくのかを解明する上で、一つ

の興味深い事例である。これが他の中国製異体字についてもどの程度認められる現象であるのか、さらに事例を収集し検討する必要がある。

また近世以降「畫」の略字体「画」が新たに受容されたことによって、既存の「晷」の使用状況にどのような変化が現れるかという点も、中国側の異体字の受容過程に関わる重要な問題である。今後の調査に譲ることとしたい。

参考文献

- 石塚晴通（一九九九）「漢字字体の日本的標準」『国語と国文学』七六一五
- 菊地恵太（二〇一六）「略字体の成立と使用拡大の一面面——「尺」の旁「尺」を例として——」『訓点語と訓点資料』一三六
- 菊地恵太（二〇一八）「量用符号を利用した略字体の成立と展開」『日本語の研究』一四—二
- 笹原宏之（二〇〇三）「異体字とは」笹原宏之・横山詔一・エリク・ロング『現代日本の異体字』三省堂
- 張涌泉（一九九五）『漢語俗字研究』岳麓書社（増訂本二〇一〇、商務印書館）
- 築島裕（一九八八）「漢字の書体・字体」佐藤喜代治編『漢字講座Ⅰ 漢字とは』明治書院

字典類

- 赤井清美編『行草大字典』東京堂出版
- 北川博邦編『章草大字典』雄山閣出版
- 佐野光一編『木簡字典』雄山閣出版
- 奈良文化財研究所編『日本古代木簡字典』（改訂新版）八木書店

調査影印資料

〈中国字書・字樣書等〉

漢字字体の組織的な略体化——略字「尺」の構成素「尺」の場合——

『唐代字様』二種の研究と索引』桜楓社／『龍龜手鏡』『集韻』『大廣益會玉篇』『康熙字典』中華書局／『字彙・字彙補』上海辭書出版社／『正字通』中国工人出版社／『宋元以来俗字譜』文化書房博文社／中國哲学書電子化計劃（四声篇海）<https://cext.org>

〈日本辞書〉

『高山寺古辞書資料 第二』（篆隸万象名義）東京大学出版会／『新撰字鏡 天治本 附 享和本・群書類従本』『運歩色葉集 元龜二年京大本』『運歩色葉集 天正十七年本』臨川書店／『類聚名義抄 觀智院本』（天理図書館善本叢書）『色葉字類抄 一 三卷本』（尊經閣善本影印集成）八木書店／『圖書寮本類聚名義抄』『字鏡集 白河・寛元本 研究並びに総合索引』『字鏡鈔天文本 研究並びに総合索引』『倭玉篇夢梅本 篇目次第 研究並びに総合索引』『改訂新版 古本節用集六種 研究並びに総合索引』『印度本節用集古本四種 研究並びに総合索引』『文明本節用集研究並びに索引』『大谷大学本節用集研究並びに総合索引』勉誠出版（勉誠社）／『倭玉篇五本和訓集成』汲古書院／『古本下学集七種 研究並びに総合索引』『中世古辞書四種 研究並びに総合索引』風間書房／『伊呂波字類抄 室町初期写十卷本』雄松堂出版／『節用集 正宗文庫本』ノートルダム清心女子大学国文学研究室古典叢書刊行会／『異体字研究資料集成』雄山閣

〈古典籍〉

『日本書紀』『古事記』（尊經閣善本影印集成）『続日本紀 蓬左文庫本』八木書店／『三教指帰注集の研究』朋友書店／『古事記 国宝真福寺本』桜楓社／『鈴鹿本今昔物語集 影印と考証』京都大学学術出版会／『東大寺諷誦文稿』雲州往来二種』『太平記 玄玖本』『玉塵抄』勉誠社（勉誠出版）／『延慶本平家物語』『古典研究会叢書 太平記神田本』『沙石集』『平家物語 小城鍋島文庫本』（古典研究会叢書）汲古書院／『屋代本平家物語』角川書店／『論語抄の国語学的研究 研究・索引篇』武蔵野書院／『詩学大成抄の国語学的研究 影印編・研究篇』清文堂／『中華若木詩抄 寛永版』笠間書院／

〈その他ウェブサイト〉

奈良文化財研究所 木簡庫 <http://mokkankonabunken.go.jp>
漢字字体規範史データベース <http://www.hng-data.org/>

奈良地域関連資料画像データベース（興福寺本日本霊異記）<http://mahorobai.ibnara-wu.ac.jp/>

漢字字体の組織的な略体化——略字「尺」の構成素「尺」の場合——